

中国におけるツルゲーネフ受容

—— 民国初期の文壇を中心に ——

秋 吉 收

(平成七年十一月二十四日受理)

一

一九三二年十二月三十日、魯迅は「中国とロシアの文字の交りを祝す」と題する雑文の中で次のように述べている。

我々の一部の青年は圧迫されていると感じ、痛みしかなく、もがいていた。かゆくなるような按摩は必要でなく、切実な指示を尋ね求めつつあった。

そのとき、ロシア文学が眼にはいった。

その時、ロシア文学が我々の教師であり友人であることを知った。その中に、被圧迫者の善良な魂、その辛酸、そのもがきをみたからである。そして四十年代の作品とともに希望を燃やし、六十年代の作品とともに悲哀を感じた。

当時の大口シア帝国が中国を侵略しつつあったことを我々が知らないわけがあるのか。しかし、文学から一つの大きなこと、世界には圧迫者と被圧迫者という二種類の人間がいることがわかった。

魯迅のこの言葉は、中華民国初頭一九一〇年代当時の文壇の状況を回想したものである。中国同様、王侯貴族による搾取に苦しんでいたロシアの民衆を描いた文学は、魯迅の言葉に見えるように非常な共感をもつ

て中国の若者たちに迎えられた。ゴースキーやトルストイ、そしてツルゲーネフ等著名なロシア作家の作品は極めて早い時期から中国の文壇に紹介されている。そして一九一七年のロシア革命の成功に至って、中国文壇へのロシア文学移入の動きは大いに加速された。小論では特にツルゲーネフに焦点を絞って、中国の文壇にどのように受容されていたか辿ってみたい。なお、魯迅とツルゲーネフの関わりについては小論に先だつてまとめてみたので、参照されたい。

それでは、まず初めに民国初期におけるツルゲーネフ作品の翻訳一覧表を挙げる。

【ツルゲーネフ作品翻訳一覧表】

題 名	翻 訳 者	掲 載 誌 ・ 紙	年・月・日
散文詩四篇(「乞食之兄」「地胡吞我之妻」「可畏哉愚夫」「嫠婦與菜汁」)	劉半農 (用文言文)	『中華小説界』2・7	'15・7・1
小説「春潮」	陳 赓 (拋英訳本)	『青年雑誌』1・1 『1・4	'15・9・15
小説「初恋」	陳 赓 (拋英訳本)	『新青年』1・5 『2・2	'16・1・15
散文詩二篇(「狗」「訪員」)	劉半農 (拋英訳本)	『新青年』5・3	'18・9・15

「死」(「獵人日記」より)	冷風	『晨报副刊』	'19.4.7
小説「失望」	沈穎	『晨报副刊』	'20.1.30
小説「夢」	沈穎	『晨报副刊』	'20.2.4
「霍爾與喀里奈赤」	沈穎	『晨报副刊』	'20.2.11
(「獵人日記」より)	沈穎	『晨报副刊』	'20.2.18
「唔唔」	胡愈之	『東方雜誌』17.4	'20.2.19
劇「途中談話」	仲持	『晨报副刊』	'20.3.25
「屠爾蓋涅夫的散文詩」 (五十篇連載)	沈穎	『晨报副刊』	'20.3.25
「獵人日記」(二十篇)連載	郭沫若	『時事新報・学灯』	'21.2.16
「自然」	耿濟之	『小説月報』12.3	'21.3.10
「活骸」(「獵人日記」より)	海峯	『小説月報』12.7	'21.7.10
「工人和白手的人」	沈穎	『上海商務印書館刊』	'21.8.8
「前夜」(未見)	松山	『東方雜誌』18.17	'21.9.10
「老婦人」	王統照	『小説月報』12卷 号外「俄国文学研究 專号」	'21.9.10
「尺素書」	耿濟之	同 右	'22.1.1
「父与子」(未見)	耿濟之	『上海商務印書館刊』	'22.5.10
「門檻」	沈性仁	『小説月報』13.5	'22.5.10
「屠格涅夫散文詩集」	徐蔚南	『民国日報・觉悟』	'22.9.18

(二十四篇連載)			
小説「戰士」	畢庶遠	『晨报副刊』	'22.12.22
「城里的医生」	趙景深	『時事新報・学灯』	'23.1.28
小説「野店記」	畢樹棠 (「英訳本」)	『晨报副刊』	'24.2.31
喜劇「在貴族長家里的早餐」	曹靖華	『東方雜誌』21.19	'24.2.10
散文詩「麻雀」	鄭振鐸	『小説月報』16.1	'25.1.10
散文詩「玫瑰」	章素園	『語絲』26	'25.5.5
小説「愛與死」	樊仲雲	『東方雜誌』22.10	'25.5.25
散文詩四篇(「乞丐」「通訊員」 「処世法」「對話」)	湯鶴逸	『晨报副刊』	'26.2.8
散文詩三篇(「玫瑰」「老人」 「種的筵席」)	湯鶴逸	『晨报副刊』	'26.3.4
「崎零人日記」	樊仲雲	『文学週報』	'26.11.21
小説「烟」	仲雲	『東方雜誌』24.17	'27.9.10
小説「羅亭」(「ルーゼン」)	趙景深	『小説月報』19.1	'28.1.10

※ 翻訳の原本が明記してあるものは、翻訳者の欄に付した。また、未見の
単行本については、小論に関するものに限り『民国時期総書目・外国文学』
(一九八七年、書目文獻出版社刊)の記載によって補った。これ以降の翻
訳については、重訳が多いこともあり、ここでは挙げなかった。

中国の文壇で、ツルゲーネフの文学を最初に本格的に論じたのは、一
九二〇年二月『東方雜誌』に掲載された胡愈之の「都介涅夫(ツルゲー
ネフ)」である。

実際にロシア文学に世界トップの位置を占めさせた最大の功労者としては、ツルゲーネフとトルストイを数えねばならない。なぜなら彼ら以前にはロシア文学はロシア文学に過ぎず、世界とはならん連関するものではなかったのが、彼ら二人の登場以来、ロシア文学は真の世界文学へと変貌を遂げたのであるから。トルストイは最大の人道主義者であるが、ツルゲーネフは人道主義者でありかつ最大の芸術的天才である。トルストイの小説や戯曲はそれに借りて彼の主義を宣伝したもののだが、ツルゲーネフの小説は逆に純粹な芸術作品である。トルストイの文学は現在の我が国の人士にもそれを解するものが現れている。だが、こんにち西洋文学を論じるものはきまって思想面に偏しており、ツルゲーネフのような芸術的天才に注目する人は少ない。私は文学は畢竟一種の芸術で、思想とは文学の上に表現されるべき一種の事物に過ぎないと考える。西洋の近代文学を吸収しようとするなら、我が国の国民文学を確立せねばならないが、芸術面は思想面よりも更に研究すべき課題である。そこで、私はロシア作家の中でも特にツルゲーネフを選び取り、ここにその概要を紹介する。

中国へ紹介されるにあたってツルゲーネフはトルストイと双璧と評されながら、思想よりも芸術面に重点がおかれていたことは注目される。「父と子」や「ルーヂン」などの社会派小説に先んじて「散文詩」や「春の水」「初恋」がまず翻訳されていることにもそのことはよく表れている。以下、「恋愛小説」「散文詩」「獵人日記」「父と子」「ルーヂン」といったツルゲーネフの代表作ごとに中国の文学者による主要な論評を取り上げながら考察してみたい。

二

劉半農によってツルゲーネフが初めて中国に翻訳紹介された一九一五

年は、近代思想、近代文学の移入に極めて大きな役割を果たした『青年雜誌』（一九一六年九月より『新青年』と改名）発刊の年に当たり、文壇にとって大きな一步を踏みだした年であった。だが、世界には第一次世界大戦の嵐が吹き荒れ、欧米諸国の手が中国から弛んだ隙に乗じて、日本やロシアが着々と侵略の魔手を伸ばし、社会は混沌の度合いを深めていた（一九一五年五月には袁世凱が日本の「二十一ヶ条の要求」受理、同年十二月には自ら皇帝を名のり「中華帝国」樹立）。こうした社会情勢を反映して、『新青年』の誌面にも「国体の前途」「欧州戦争と青年の覚悟」といった社会的言論や時事関係の記事が目立っている。そんな中にあつても文壇は旧態依然の様相を呈し、科挙に合格して将来を約束された男（才子）が名家の絶世の美女（佳人）と一目見た瞬間に結ばれるという、鴛鴦胡蝶派のワンパターンの恋愛小説が文学界を席巻していた。劉半農や胡適、周作人等を初めとする近代文学者たちにとって、新文学を開拓するためにはまずこの鴛鴦胡蝶派の羈絆から脱することが至上命題であり、彼らは西欧文学の翻訳紹介に努めた。真っ先に取り上げられたのがツルゲーネフである。『新青年』創刊号から四号まで中編小説「春潮」が、そして五号から二巻二号までは「初恋」が立て続けに訳載されている。両篇共に純然たる恋愛小説で、しかもどちらも女性に翻弄される男性を描いた作品である。国家の存亡が叫ばれている時世にあつて、なぜこのようなものをと奇妙でさえあるが、鴛鴦胡蝶派の恋愛小説にぶつけるにはやはり恋愛小説が最も効果的だったのである。ツルゲーネフの小説中、その恋愛構造はむしろ女性中心、しかも女性の心理や言行が生き生きと描写され、何より恋愛の「過程」が描き出されているという点で才子佳人小説の恋愛形態とは隔世の感があった。女性を男性の付属物として捉える中国古来の思想にとつては画期的に新しい視点だったのである。また、掲載誌『新青年』は「女子問題」專欄を設けるなど女性問題に早くから取り組んでおり、後に該誌上で周作人が与謝野晶子の「貞操論」を訳載したことをきっかけに胡適の「貞操問題」、魯迅の「私の節烈観」等

一連の論評が掲載され、婦人解放論議が急速に盛んになることは衆知の如くだが、このようにツルゲーネフの恋愛小説の『新青年』連載は、五四以後盛んに論じられることになる女性解放運動の萌芽をも内包していたと言えよう。鴛鴦蝴蝶派の恋愛小説に嫌気がさしていた当時の文学青年たちはこの新しい文学形態に対し、非常な喜びをもって迎えている。「春の水」を翻訳した陳赓は訳者前記でまずツルゲーネフの略歴を紹介した後に、次のように述べている。

この作品は彼の短篇の中の佳作で、人格を尊び、純愛を描写している。その用語はイメージを巧みに表現し拔群の冴えを見せる。

また、巴金も一九三五年執筆の「在門檻上——回憶錄之一」^(註6)で、当時の様子を次のように回想している。

私は以前ツルゲーネフの長篇小説を読むのが好きだった。彼の女主人公はいつも決まって男主人公よりも強かった。彼女たちには勇氣があり、氣概があつた。

次に、「散文詩」に注目しよう。一九一五年、劉半農によって中国に初めて紹介されたツルゲーネフ作品は散文詩であつた。彼はその序文で次のように述べている。

ロシア文学家ツルゲーネフ Ivan Turgenev はトルストイと名声を等しくする。トル氏の文章は平易なものがほとんどで読みやすいので知っている人も多い。だがツル氏の文章は古雅でありしかも言わんとするところがトル氏ほど明解でないので知っている人は少ない。両氏を比較しても実に甲乙つけ難いのである。ツル氏の著書は全部で十五集、その中には詩文と小説どちらも見えるが、小説の短篇のものは極

めて少ない。ここに全集から四篇をとる。「乞食」「マーシャ」「あほう」「キャベツ汁」、これらはすべて晩年に書かれたものである(氏は一八一八年の生れで、一八八三年没。この四篇は一八七八年の二月から五月の間に作られているが、この時すでに齡六十であつた。筆致も内容も、均しく悲惨で哀切で、情に耐えがたくさせる。私がこれまで読んだ小説の中でもこれはほとんど最高のものである。どうしてわが国の小説家諸氏に味わってもらわずにおれよう。

劉半農がここに訳出した「小説の短篇のもの四篇」とはつまり「散文詩」のことである。当時、中国にはまだ「散文詩」というジャンルは認識されていなかったのである。散文詩の翻訳紹介が盛んに行われていることは翻訳一覧表からもうかがえるが、実はこれにはもう一つの理由があつた。「散文詩型」は、「押韻せねば詩ではない」という旧套を切り崩すための新体詩派の急先鋒だったのである。その最も顕著な表れが一九二一年から二二年にかけて『時事新報・文学旬刊』誌上で展開された散文詩論争であるが、その中でたとえば新体詩派に属する鄭振鐸の「論散文詩」でも次のようにツルゲーネフを取り上げている^(註8)。

散文詩の現在における根柢はすでに安定したものとなつた。一世紀前には散文詩は詩ではないという議論にまだ多くの人が賛成していたかもしれない。……数多くの散文詩作家の作品が「押韻せずんば詩にあらず」という信条を粉々に撃ち破つたのである。……ツルゲーネフ、ワイルド等の詩人の作品は詩に数えられないだろうか？

このように旧体詩に対抗する手段として援用された側面は否めないが、彼らがツルゲーネフの「散文詩」に真剣に向き合っていた様子は随所に窺うことができる。一九二〇年に初めて五十篇全部を翻訳した沈頌は次のように書いている。

(ツルゲーネフの)作るところの文章は、陰鬱な意境ではあるが、芸術の美を極め、ロシア写実派小説家の中の最も優秀な人物に数えられ、トルストイと並び称せられる。……散文詩一卷がある。全部で五十篇、「衰老」"Senilia"と名付けられ、それは彼の晩年の著作である。洗練された描写で、そこから彼の思想、感情を見いだすことができる。

また、一九二〇年十二月二十日の『時事新報・学灯』に自作の散文詩「冬」「彼女と彼」「女の死体」「大地の叫び」四篇掲載するなど早い時期からやはり散文詩に取り組んでいた郭沫若も、一九二二年二月の同紙にツルゲーネフの散文詩「自然」を翻訳して、その序文でこう述べている。

「ツルゲーネフの散文詩」 ツルゲーネフ氏の文芸作品はすでにわが国に紹介されたものも少なくない。私がここに訳すのは一八七八年から八二年の四年間に書かれた小品文で、雑誌『欧州報知』に連載された。「散文詩」の名は雑誌の編集者が初めてつけたものである。この詩集は最も人口に膾炙しているもので、ひよつとすると国内にも私の知らないところで翻訳が出ているかもしれない。だが私は重訳を恐れずに意をもつてこれを翻訳しようと思う。翻訳にはそれぞれ長ずるところがあり、読者には選択の自由が与えられているからだ。

郭沫若の傾倒ぶりが窺えるが、ツルゲーネフの「散文詩」はこの他にも巴金や魯迅(ロウシュン)を始めとして中国の文壇に多大の影響を与えている。現在に至るまで絶えることなく翻訳、重訳が出ていることもそのことを傍証しよう。

さて、辛亥革命の実質的失敗を経て、ロシア革命、第一次大戦の終結、そして五四運動と、政治的緊張が高まっていく中で、ツルゲーネフ文学の受容の面でも些かの変化が認められる。文壇の視線は叙情的傾向の作品からより社会的内容を扱ったものへと移っていったのである。こうし

た中で、続いて文壇の注目を浴びたのは「獵人日記」であった。一八六一年のロシア農奴解放の実現に思想面でも大きな役割を果たしたこの短篇小説集は、官憲の検閲に配慮して、貴族の狩獵の手記の形を取りながら農奴の悲哀と社会の歪みを淡々と綴った作品である。全体で二十四篇から構成されるが、一九一九年と二〇年に『農報副刊』に一篇ずつ訳載された後、一九二一年から二四年にかけて『小説月報』誌上に断続的にではあるが二〇篇あまりが一気に訳載される。当時の文学研究会の「農村へ」のスローガン(都市の知識人の生活を描いた作品ばかりが多かった中で、民衆の眞の姿農村を描写しようという呼び掛けが周作人や鄭振鐸等が中心となつて行なわれた)にも呼応してこの作品は当時の文壇にかなりの反響を与えた。連載中の一九二二年に「獵人日記」訳者の耿濟之によつて書かれ、同『小説月報』誌上に掲載された「獵人日記研究」は二十頁に及ぶ長篇で、該小説評価の中枢に位置するが、その中には、「ロシア文学がいかにかに農奴制と対決してきたか」「ツルゲーネフの農奴制嫌悪に彼の幼小からの体験がどのように作用しているか」「他の西洋文学の対決の歴史をどのように糧とし、反映させているか」といった問題について詳細な論及が行われ、農奴解放以前のロシアの状況と当時の中国の農村とをだぶらせて、中国の改革に真剣に取り組む様子が窺える。瞿秋白もその点に着目していた一人である。彼の「十月革命前のロシア文学 九 農奴解放と文学」から引用する。

ツルゲーネフのこれらの雑談小説は、農奴制の内容に対して、数十重もの黒いベールを引き剥がしたといつてもよい——農民の愚かさや憂愁それを実直で誠実なことを——そして農奴制が廃さざるべからざることを非常に明確に証明したのである。

ここで今一つ注目したいのは、中国の年若い文学者たちは「獵人日記」に農奴解放という政治的意義を強調すると同時に芸術評価も忘れてはい

なかったことである。先の「獵人日記研究」の最後の部分で耽溺之はこ
うも言っている。

「獵人日記」中の「人物」と「自然」の描写も絶妙である。たとえ
我々がこの書物の効果如何を論ぜずとも——つまり農奴制への影響の
如何——彼の芸術面において常に我々を「百篇読んでも厭きない」
「恋々として去りがた」くさせる価値を有するのである。

沈從文もまた質問に答えるという形で當時を回想して次のように述べ
ている。

問：あなたがタゴールの影響を受けたという人がいますが、正しいで
すか？

沈：タゴールの影響はそれほどでもない。むしろチェーホフとツルゲ
ーネフの作品をかなり読んだ。……ツルゲーネフの「獵人日記」は人
と景色を融合させるという点で、独自の成功を収めている。このよう
に人事は一定の背景の中に発生することを現代作家は必ず理解する必
要があると私は考えている。

このような受容の過程は、我々に日本文学におけるツルゲーネフ受容
を想起させる。日本においても、中国に先だつこと三十数年の一八八八
（明治二一）年に二葉亭四迷が「獵人日記」中より摘訳した「あひびき」
「めぐりあい」の影響の下に国木田独歩の「武蔵野」が書かれたことはよ
く知られているが、共通するモチーフはとりもなおさず「自然」描写の
妙であった。そしてこのような日本文学の動向にも中国の若い文学者た
ちが目を配っていたこともまた興味深い事実である。一九三三年八月発
行の『文学』第一巻第二号はツルゲーネフ逝去五十周年記念特集号であ
ったが、その中に「ツルゲーネフの日本文学に対する影響」と題する小

記事が見える。

日本で最初に西洋文学を紹介したのも、中国の林琴南の時代同様、
雑駁でまとまりなく、幼稚で浅薄な空気が抜け出てはいなかった。
選ばれる原作も世界の一流の名著ではなく、またその訳文もぞんざい
で新鮮味がなく、このためついにこの国の文壇に新たな空気を吹き込
む原動力足り得なかった。二葉亭四迷がツルゲーネフの作品を紹介し
て初めて西洋文学が日本の新文学に意義ある影響を与えることになっ
たのである。

二葉亭四迷が最初にツルゲーネフの作品を紹介したのは明治二十一
年の夏のことである。彼はまず「獵人日記」の中から一篇の短編を訳
して『国民之友』誌上に発表し、同年十月にはまた「めぐりあい」を
訳して『都之花』に発表した。二葉亭の選んだ原作が良かったばかり
でなく訳文も清新で、当時の敏感な文学青年はこれを読んでみな驚嘆
した。加えて日本の文学者はもとも自然美を愛する傾向があり、ツ
ルゲーネフはまさに世界でも卓越した叙景作家であり、彼は自然描写
においてたぐいえない天才を有し、それは日本の花鳥風月趣味とも遠く
隔たっていたのでたちまち影響を及ぼすことになったのである。

ツルゲーネフの翻訳紹介にあたつて依拠したものはほとんどが英語訳
もしくはドイツ語訳で、日本語訳を媒介としたものは見られないが、昇
曙夢の「ロシア文学と社会改造運動」が一九二二年三月発行の『東方雑
誌』に翻訳されていることからも窺えるように、文学、思想の両面であ
り日本の文壇の動きに気を配っていたのである。またそのことを考察
する上で、魯迅や周作人ら日本留学生の存在が大きな意味をもったであ
ろうことは言うまでもない。

次に、ツルゲーネフの長篇小説「父と子」および「ルーヂン」を取り
上げる。ここでは、中国の個々の作家がどのようにに自己をツルゲーネフ

の作品の上に投影していったかについても考えてみたい。

「父と子」は、一八六二年にロシアで発表された当初から異常な反響を呼んだ小説である。そこには世代間の矛盾が描かれており、若い世代と父親世代の両世代から批判を浴びたが、何よりも読者に違和感を覚えさせたのは「ニヒリスト(虚無主義者)」バザーロフの存在であった。バザーロフは科学至上主義を標榜して、徹底して芸術を否定し、さらにあらゆるものに対して徹頭徹尾批判的な態度をとり続ける。ツルゲーネフはこの新しいタイプの登場人物に、暗澹たるロシアに新しいタイプの活動家が出現することを託したのだったが、当時の文壇には受け入れられずこれ以後失意の淵にたゆたうことになる。

後にこの「虚無主義者」との呼称が一人歩きして政治的意義に解され、テロを手段とする革命党員と混同されるに至るが、中国の若き革命家たちは敏感にロシアのこの動静を嗅ぎとっていた。「父と子」が中国に初めて翻訳紹介されたのは一九二二年であったが、遡ること十五年の一九〇七年に、当時日本留学中であった周作人は「論俄国革命與虚無主義之別」と題する論文の中で次のように語っている。

最近ロシア人クロボトキンの「自叙伝」を読んだが、革命と虚無論者の状況を論じた部分は世間に伝わっていることと頗る違うので、識者の参考に供したい。(以下引用…秋吉注)

ロシア革命は今日に至ってますます急を告げているが、そのもともとの発端を辿れば十九世紀中葉に遡る。当時盛んに発表された文章は、その多くが農民の苦難を書いて、読者はこれに感した。……次第に「父と子」(ロシア作家ツルゲーネフの名著、詳しくは後述)の衝突が浮き彫りになり、青年は家庭の制約に堪えきれなくなつて多くが家を出て学問に投じたのである。

虚無黨人 Nihilist の一語は正確には虚無論者と訳すべきであるが、それはツルゲーネフの名著「父と子」の中で初めて登場した。後にこ

れを勝手に自称として用いる者が現れ、政府はそこでそれをもって反逆者の通称となしたのである。ヨーロッパやアジアの文士たちは例によって盲信し、ロシアの擾乱はすべて虚無黨の仕業だと考えひいてはテロリズムの虚無主義と混同したのである。

周作人の回想^(注17)によれば、この論文はもともと兄の魯迅が彼に書かせたものだという。それを裏付けるように、魯迅は一九二六年に雑誌『語絲』誌上に次のように綴っている^(注18)。

中国人は、以前、ロシアの「虚無党」という三字を聞いただけで肝をつぶして震え上がり、今のいわゆる「赤化」などより、もつとひどいものだった。が、実際には、そんな「党」はあるはずもない。ただ、「虚無主義者」、または「虚無思想家」というのはある。これはツルゲーネフ (Turgenev) がつくり出した名で、神を信ぜず、宗教を信ぜず、一切の伝統と権威を否定して、自由意志にもとづいた生活への復帰をねがう人物をさして言つたものである。

中国における初期の「父と子」評価は、無政府主義運動などの動きともリンクして、魯迅兄弟の言説に見られるような一貫して政治色の強いものである。一九二〇年代、中国全体が革命戦争へと傾斜していく中で、文学界もまさに革命へと突入していったのだった。

一九二八年には「ルーデン」が『小説月報』に連載される。この小説には才能に恵まれ他人を心服させる雄弁を操るが、実践能力の伴わない「余計者」が描かれる。革命前夜のロシアの良心的貴族知識人の典型たるこの人物形象は、同じように大志を抱きながら厳しい現実の中で、ほぞを噛んでいた中国の知識人たちの熱い共感を呼んでいる。北京のロシア語専修館で勉強していたころから、すでにツルゲーネフの作品を読んでいた瞿秋白は、一九二四年に書いた北京『晨报』記者としてのモスクワ

見聞録『赤都心史』の中で「ルーデン」の一節を引いて自ら「中国の余計者」と自認しているが、また「十月革命前のロシア文学」の中で、次のように述べている。

ツルゲーネフとゴンチャロフの小説から、我々は当時のロシア知識界の疫病を見いだすことができる、つまり所謂「余計者」である。「余計者」は大概すべてにおいて実践できず、ただ空談するばかりである。だが、実際これらの者たちは確かに良い公民であり、したいと思ってもできない英雄なのである。……ロシア文学の中では従来これらの者を「余計者」と称した。つまり彼らは実際には社会にとつて有益で有り得ないというのだ。とは言えこれもいさか不公平で、彼らの思想は確かにロシアの社会意識の発展過程において欠くべからざるものなのである。——「社会を顧みない」から「社会を思考する」へ……それから実行に移す——だが彼らの心の中の矛盾は彼らにそれ以上前進することを許さなかつたのである。

郁達夫もまたツルゲーネフの小説に強い共感を示した一人である。彼は魯迅と共に主編した『奔流』誌上に、ツルゲーネフの著名な講演「ハムレットとドンキホーテ」を掲載しているが、一九三三年には『文学』第一巻第二号に、「ツルゲーネフの『ルーデン』出版の前」と題して次のように書いている。

古きより新しきにいたるまで、また偉大なものからそうでもないものまで数限りない外国作家の中で、僕が最も愛し最も親しみを覚え、彼の作品と付き合つて最も長くしかも決して嫌になることがないのはツルゲーネフである。それは僕が他の人と同じでない一種の偏向かもしれない。なぜなら僕が小説を読み始め、小説を書きたいと思い始めたのは、すべてこの柔和な容顔で、目にはいささかの憂いをたたえ、

あごひげをたつぷり蓄えた北国の巨人の影響からだから。だが彼の長篇短編の作品のほとんど四分の三が中国に翻訳されている点から見れば、ツルゲーネフの崇拜者は中国において決してわずか数人の文筆を弄するものだけではないことも極めて明白である。

「沈淪」等に代表される郁達夫作品の主人公は、才覚があり、社会に不満を持つてはいるが、軟弱で無力でいつも劣等感コンプレックスの人物で、その姿は「余計者」ルーデンを彷彿させる。作品中の登場人物ばかりでなく郁達夫とツルゲーネフの経歴の上にも相似点を見いだせる。彼らはどちらも幸福とは言えない異郷での生活経験を持つ。ツルゲーネフは「獵人日記」や「父と子」の出版に端を発して祖国を追われ、生涯愛し続けた、夫あるフランスの女性歌手ヴィアルドーに寄り添つてフランスに住んだ。そして異郷にありながらも祖国ロシアに根ざした作品を書き続けている。対する郁達夫は日本に十年留学したが、帝国主義の高揚期にあつた日本における中国人蔑視は若い留学生郁達夫をさいなみ続け、結果として彼の作品は常に濃厚な感傷的雰囲気を含んでいる。二人はまさにロシアの「余計者」と中国の「余計者」であつた。

三

中国の文学者がツルゲーネフの作品を受容した過程をまことに大雑把ではあるが辿つてみた。多様な動機と様々の経路が見られるが、それは彼らが暗黒の中国をいかに変革していくかという問題に真剣に取り組んだ一つの道程であつた。結局答えを見出せずに時代の荒波に吞まれていった若者も数知れないが、そんな彼らもまたツルゲーネフの散文詩「しきい（中国訳：門檻）」に描かれた女性革命家に自分の姿を重ねていたに違いない。

「しきいー夢」

とても大きな建物が見える。

正面の壁には、せまい戸があけはなしになっている。戸口のなかは——陰気な霧だ。たかい敷居の前に、娘がひとり立っている。……ロシア娘である。

一寸さきも見えぬその霧は、しんしんと冷気をいぶいている。こおりつくような気流にまじって、建物の奥からは、ゆつくりと、うつろな声がひびいてくる。

「おお、おまえは、その敷居をまたごうというのか、——何がおまえを待ち受けているか、おまえは知っているのか？」

「知っています」と、娘がこたえる。

「寒さ、餓え、憎しみ、あざ笑い、さげすみ、恥かしめ、牢屋、病気、やがては死、いいか？」

「知っています。」

「だれにも会えぬ、まったくの孤独、いいか？」

「知っています。……覚悟の上です。どんな苦痛、どんな鞭うちも、しのびます。」

「それも、敵からだけではないぞ。——肉身の征矢^{そや}、親友のつぶて、いいのか？」

「はい……それも承知です。」

「よし。おまえは犠牲になる覚悟だな？」

「はい。」

「名もない犠牲にか？——お前が身をほろぼしても、だれひとり……だれひとり、何者の記念をあがめたらいいか、知りはしないのだぞ……」

「感謝も同情も、ほしくはありません。名前もいりません。」

「犯罪もやる覚悟か？」

娘はうなだれた。……「犯罪も覚悟の上です。」

声は、ややしばし、つぎの問いつまった。

「わかつているか？」やがて声はつづけた。「現在のおまえの信念に、幻滅がくるかもしれないぞ？ あれは迷いだつた、あたら若い命を散らしてしまつたと、さとの時がくるかもしれないぞ？」

「それも知っています。でもやっぱり、わたしははいりたいのです。」

「はいれ！」

娘が敷居をまたぐと、——重たい幕が、そのあとにおりた。

「あほう！」だれかがうしろで、齒ぎしりした。

「聖女だ！」どこかで、それに答える声がした。

(一九五八年初版、岩波文庫による)

*

一九八三年はツルゲーネフ逝去百周年にあたり、外国文学研究誌がこぞつて特集を組んでいる。^(注2)さらに十月二十日から二十九日にかけては廈門において「ツルゲーネフ討論学会」が開催され、全国から百三十名以上の参加があつたという。^(注2)研究成果としても従来見られなかった新しい視点が提出されている。例えば朱憲生氏の「屠格涅夫(ツルゲーネフ)筆下的兩類女性」^(注23)にはこうある。

ツルゲーネフの時代はもう過ぎ去つた。……だが、ツルゲーネフの描いた女性像は、彼女たちがもともと理想像であつたからかもしれないが、今日においてもかの男性像に比してずっと我々にとって身近である。……ツルゲーネフは大量に恋愛を描いたが、彼のいかなる作品にもごくわずかの色情描写も探し出せない。彼の作品はこのように「衛生的」であり、それは世界文学の中でもめずらしい。恋愛小説が非常に少ないとは到底言えない今日にあつて、この一点はとりわけ我々が手本とすべきものである。

近年、日本同様中国においてもツルゲーネフ研究のトーンは下降気味であるようだ。現代もまた、「芸術」より「思想」の時代ということであろうか。一九九二年に書かれた陳桑氏の「ツルゲーネフ研究簡論」^(註28)の結びの言葉は、現在の状況をこう総括する。

ツルゲーネフはある面で二人の同時代作家（ドストエフスキーとトルストイ・秋吉注）に比してやや遜色があるかもしれない。だが、それでもなお彼なりの魅力を有しており、それは彼らと肩を並べるに足るものである。……彼の国際文壇上の地位は他の作家から凌駕されたとは言っても、彼の小説芸術は決してまだ「時代遅れ」ではなく、依然として我々が参考とし、また研究するに足るものである。

こうした中で、一九八八年に『ツルゲーネフと中国』^(註29)を出版して、中国におけるツルゲーネフ研究の中心的役割を担う孫乃修氏がついに先日『貴族莊園中の不和谐——屠格涅夫傳』^(註30)を出されたことは特筆に値しよう。今後の動向に注目したい。

注

- 1 魯迅「祝中俄文字之交」一九三五年十二月十五日『文学月報』第一卷第五・六合併号。
- 2 中国におけるロシア文学受容を扱ったものに三宝政美氏「中国におけるチェホフ——一九二〇年代の翻訳・紹介を通して——」（一九八九年三月『富山大学人文学部紀要』第十五号 五七〇頁）がある。小論を書くにあたっても多く御教示を得た。
- 3 拙稿「魯迅とツルゲーネフ」一九九五年十月『中国文学評論』第八号 三五頁。
- 4 一九二〇年二月『東方雜誌』第十七卷第四号 七五頁。
- 5 最初に「婦女問題」專欄が設けられたのは二卷六号（一九一七年二月）で、以後四卷一号（一九一八年二月）に至るまで連載され、「女子教育」「中国

国女子の婚姻と育児の問題を論ず」「女権平議」などの論文が見える。連載としてはいつたん終了しているが、四卷五号（一九一八年五月）には与謝野晶子の「貞操論」が訳載されており、該誌は女性問題を一貫して取り上げている。

- 6 巴金「在門檻上——回憶錄之一」一九三五年六月十日『水星』第二卷第三期 二二五頁。
- 7 一九二一年から二年にかけて『時事新報・文学旬刊』誌上で展開された散文詩論争について、拙稿「徐玉諾と魯迅——散文詩集『野草』をめぐる——」（『中国文学論集』第二十一号 一九九二年十二月、九州大学中国文学会）に少しく言及したので参照いただければ幸いである。
- 8 西諦（鄭振鐸）「論散文詩」一九二二年一月一日『時事新報・文学旬刊』第二四期。二二年二月一日同紙第二七期掲載の滕固「論散文詩」にも取り上げられる。
- 9 巴金訳「散文詩」は、一九四四年に文化生活出版社より出版された。魯迅については注三参照。
- 10 一九二二年三月『小説月報』第十三卷第三号。
- 11 瞿秋白「十月革命前的俄羅斯文学」九 農奴解放与文学 一九五三年人民文学出版社刊『瞿秋白文集』第三卷、四九三頁。
- 12 凌宇「沈從文談自己的創作——对一些有問題的回答」『中国現代文学研究叢刊』一九八〇年第四期 三二〇頁。
- 13 日本近代文学館編『日本近代文学大事典』（一九七七年講談社刊）、小田切秀雄著『二葉亭四迷——日本近代文学の成立』（一九七〇年岩波新書版）等参照。
- 14 一九三三年八月『文学』第一卷第二号（屠格涅夫逝世五十周年紀念特輯）ツルゲーネフの肖像を掲げるほか、次のような論著が掲載されている：阿寧闊夫（俄）著、耿濟之訳「屠格涅夫的回憶」二一八頁。郁達夫「屠格涅夫的「羅亭」問世以前」二三四頁。黃源訳「屠格涅夫未發表的散文詩」二四〇頁。補白「ツルゲーネフ關係小記事九篇」。
- 15 昇曙夢著、馥泉訳「俄羅斯文学和社会改造運動」一九二二年三月『東方雜誌』第十九卷第五号 五六頁。
- 16 獨應（周作人）「論俄國革命與虛無主義之別」一九〇七年十一月『天義』第十一・十二合冊 三三七頁。雜誌『天義』の發行所は上海だが、通信所は東京になっていた。
- 17 周遐寿（周作人）「魯迅与日本社会主義者」（一九七九年、文物出版社刊『魯迅研究資料』三）。

22

『外国文学研究 (季刊)』一九八〇年第四期 一三三頁。

「年祭」と題する記事が掲載されたのはじめ、ツルゲーネフ関係の論著はこの時期特に目立っている。

* 『特集』以外にも、『人民日報』一九八三年十一月十五日に「屠格涅夫百年祭」と題する記事が掲載されたのはじめ、ツルゲーネフ関係の論著はこの時期特に目立っている。

陳元愷「屠格涅夫与中国作家」一一四頁

六頁

朱憲生訳、C・薩達洛夫 (俄) 著「屠格涅夫和俄国现实主义性格学」六

九頁

文進「黑暗王国里的一个“幻夢”——試談「前夜」中悲觀的宿命論思想」

馬忠「論屠格涅夫的散文詩」三頁

『外国文学研究 (季刊)』一九八三年第四期

戈宝權「屠格涅夫和中国文学」二八二頁。

保・布爾熱作、胡承偉訳「觀察派的美学 (評論)」二七三頁。

居・莫泊桑作、朱赤訳「伊・屠格涅夫 (評論)」二六八頁。

普・梅里美作、吳岳添訳「伊・屠格涅夫 (評論)」二五七頁。

伊・屠格涅夫作、郎永年訳「一八八〇年版長篇小説集前言」二四九頁。

伊・屠格涅夫作、謹容訳「狗 (短篇小説)」二二一頁。

伊・屠格涅夫作、磊然訳「篤……篤……篤…… (特写)」一九七頁。

伊・屠格涅夫作、磊然訳「篤……篤……篤…… (特写)」一九七頁。

伊・屠格涅夫作、磊然訳「篤……篤……篤…… (特写)」一九七頁。

伊・屠格涅夫作、磊然訳「篤……篤……篤…… (特写)」一九七頁。

伊・屠格涅夫作、磊然訳「篤……篤……篤…… (特写)」一九七頁。

陀斯妥耶夫斯基 (ドストエフスキ) 著、周上之訳「談屠格涅夫的「貴族之家」」一九九頁。

呂寧思訳「薩爾蒂科夫——謝德林論屠格涅夫 (書信選譯)」二〇〇頁。

斯洛尼姆 (俄) 著、戴耘訳「論屠格涅夫的創作個性」一二三頁。

『世界文学 (双月刊)』一九八三年第三期「屠格涅夫專輯」

屠格涅夫著、朱憲生訳「略談丘特切夫的詩」一一〇頁。

車爾尼雪夫斯基 (俄) 著、周上之訳「幽会中的俄羅斯人——屠格涅夫的中篇小説『阿霞』讀後思考」一一二頁。

陀斯妥耶夫斯基 (ドストエフスキ) 著、周上之訳「談屠格涅夫的「貴族之家」」一九九頁。

陀斯妥耶夫斯基 (ドストエフスキ) 著、周上之訳「談屠格涅夫的「貴族之家」」一九九頁。

陀斯妥耶夫斯基 (ドストエフスキ) 著、周上之訳「談屠格涅夫的「貴族之家」」一九九頁。

陀斯妥耶夫斯基 (ドストエフスキ) 著、周上之訳「談屠格涅夫的「貴族之家」」一九九頁。

陀斯妥耶夫斯基 (ドストエフスキ) 著、周上之訳「談屠格涅夫的「貴族之家」」一九九頁。

陀斯妥耶夫斯基 (ドストエフスキ) 著、周上之訳「談屠格涅夫的「貴族之家」」一九九頁。

陀斯妥耶夫斯基 (ドストエフスキ) 著、周上之訳「談屠格涅夫的「貴族之家」」一九九頁。

陀斯妥耶夫斯基 (ドストエフスキ) 著、周上之訳「談屠格涅夫的「貴族之家」」一九九頁。

陀斯妥耶夫斯基 (ドストエフスキ) 著、周上之訳「談屠格涅夫的「貴族之家」」一九九頁。

陀斯妥耶夫斯基 (ドストエフスキ) 著、周上之訳「談屠格涅夫的「貴族之家」」一九九頁。

陀斯妥耶夫斯基 (ドストエフスキ) 著、周上之訳「談屠格涅夫的「貴族之家」」一九九頁。

18 魯迅「即座支日記 (一九二六年) 七月二日」一九二六年七月二十六日「語絲」第八十九期。

19 瞿秋白「赤都心史」一九五三年人民文学出版社刊「瞿秋白文集」第一卷、一六九頁。

20 一九二八年六月二十日「奔流」第一卷第一期。「Hamlet 和 Don Quichotte (講演)」は、郁達夫訳で創刊号の巻頭に掲載された。

21 直接目にするのできた三誌を挙げる。

『文芸理論研究 (季刊)』一九八三年第二期「紀念屠格涅夫逝世一百周年」屠格涅夫著、杜嘉泰訳「彼得堡 (ペテルブルグ) 来信」一〇九頁。

屠格涅夫著、朱憲生訳「略談丘特切夫的詩」一一〇頁。

23 『外国文学研究 (季刊)』一九八三年第四期に記事あり。

24 陳桑「屠格涅夫研究簡論」『外国文学研究 (季刊)』一九九二年第二期 三頁。

25 孫乃修著「屠格涅夫與中國——二十世紀中外文学關係研究」一九八八年、学林出版社刊。

26 孫乃修編著「貴族莊園中的不和諧聲——屠格涅夫傳」一九九四年、上海世界圖書出版公司刊。

参考：筆者所有のツルゲーネフの最近の中國語訳本は次のとおり

『獵人日記 (歌濟之訳)』一九七八年、(台灣) 遠景出版事業公司刊『世界文学全集十五』。

『処女地』(巴金訳) 一九七八年、人民文学出版社刊。

『前夜 父与子』(麗尼・巴金訳) 一九七九年、人民文学出版社刊。

『屠格涅夫選集 烟』(王金陵訳) 一九八三年、人民文学出版社刊。

『屠格涅夫選集 貴族之家』(磊然訳) 一九八五年、人民文学出版社刊。

『屠格涅夫散文選 (張守仁訳)』一九八六年、百花文芸出版社刊。

『屠格涅夫散文詩 (智量訳)』一九八七年、上海訳文出版社刊。

『巴金訳文選集 屠格涅夫等著 門檻』一九九〇年、三聯書店 (香港) 有限公司刊。

『巴金訳文選集 屠格涅夫著 散文詩』一九九〇年、三聯書店 (香港) 有限公司刊。

『屠格涅夫選集 羅亭』(磊然訳) 一九九〇年、人民文学出版社刊。

『屠格涅夫抒情詩集 (任子峰訳)』一九九一年、湖南文芸出版社刊。

『屠格涅夫選集 父与子』(巴金訳) 一九九一年、人民文学出版社刊。

『前夜 (黃偉経訳)』一九九二年、百花洲文芸出版社刊。

『屠格涅夫詩歌精粹 (滕偉訳)』一九九三年、東北朝鮮民族教育出版社刊。

『屠格涅夫散文選 (海翔選編)』一九九三年、中国世界語語出版社刊。